

巻 頭 言

昨年（2020年）の年明けから私たちの耳に届くようになった“新型コロナウイルス感染症”なる言葉が、それから1年半余を経たこの頃、ニュース番組のトップに現れることが多くなった。多くなったというよりもこれが当たり前で、そうでない時は一体なにが起こったのかと目を凝らすような次第である。

“新型コロナウイルス禍”で、何にもまして変わったことは人と会うことが難しくなったことだろう。“集まって話すのは控えろ”、“酒をともなう会食はまかりならん”との政府のお達しである。単に政府のお達しというだけでなく、自分の感染が元で周囲の人を感染させてはならないとの思いが強く、人と会わないよう努力している自分を見出すのである。社会がバラバラに切り離されていく感であり、この過程の中で様々の面での格差が広がっているという。

この期間、授業も大部分がオンラインでということになった。学生が群れていない大学構内は何とも寂しい限りである。弾けるような若さが溢れていてこそ大学だと思っている私にとっては早く本来の姿に戻ってほしいと願うばかりである。

2019年度の学位記授与式は行われず、学位記は郵送で学部卒業生に届けられたと聞いている。同窓会は卒業生と接触する機会を持たず、卒業後の連絡先を知らせてもらうことが出来なかった。すなわち卒業生は、同窓会と繋がる機会を得ないままで大学を離れていった。

2020年度は学位記授与式は、学部卒業生に対するものと修士課程修了生に対するものと同じ日の午前と午後に挙行された。以前のような数学教室での学位記授与式を行うことは出来ないが、世話役の人たちと相談を重ね、また京大本部の同窓会や理学部教務に協力を願って、学位記を手渡す会場に数学同窓会の席を設けさせてもらい、数理科学系卒業生に同窓会からの記念品を渡すと共に、同意してくれた方には卒業後の連絡先を書いてもらった。この年度は、従来に近い数の卒業生の連絡先をもらうことが出来た。

“新型コロナウイルス禍”がこれからの世界に何をもたらすのだろうか。私は時折同窓会誌を読み返すが、その度に記されている数学教室を軸とした人と人との交わりの深さに驚きを感じる。もっとも、人と人の交わりの深さは数学関係に限ったことではなく、大学全体はもちろんのこと会社や地域でもそうであったであろう。近年の移動手段の発達や、情報伝達方法の多様化とスピード化などの近代化が、人と人との交わりを希薄にしていたのであろうか、こうなることが社会の発展なのだろうか、そんな問いを思わず覚えてしまうのである。そして、“新型コロナウイルス禍”がこれからの世界に何をもたらすのだろうか。“新型コロナウイルス禍”が現在私たちに強いている“人との接触の最小化”が、間違いなくこれからの人間関係のあり方を変える切っ掛けとなり、ひいては社会のあり方を変えてゆくような気がする。また、同窓会の在り方も問われてくるかもしれない。このベクトルの向きは、私が求める向きとはどうも逆ではないかとの危惧を感じるのは、私が余りにも昔人間である故だろうか。

2021年8月10日

会長 井川 満